

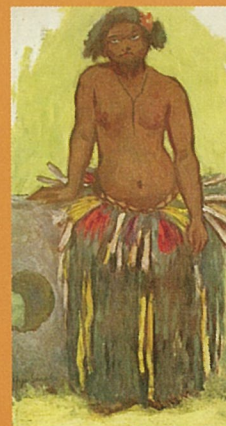
「南」から「南」へ From the south, to the south

美術家たちの



南洋群島

The South Sea Islands and the Japanese Artists: 1910-41



左上: 杉浦佐助「マスク」1929-39年、個人蔵
右上: 野口駿尾 画集「椰子の下風」より
1917年、個人蔵
中段: モートロック人形、個人蔵



横間比呂志「壺屋」1957年

2008年11月7日(金) ≧ 2009年1月18日(日)

沖縄県立博物館・美術館 [企画ギャラリー1・2]

開館時間: 9:00~18:00 (但し金・土曜は20:00まで) 入館は閉館30分前まで 休館日: 月曜(祝日の場合翌日振替)、年末12月29~31日
観覧料金: 一般800 [640] 円 / 大高生600 [480] 円 / 中小生300 [240] 円 * [] 内は20名以上の団体料金及び前売料金
主催: 沖縄県立博物館・美術館 / 琉球新報社
後援: パラオ共和国大使館 / マーシャル諸島共和国大使館 / ミクロネシア連邦大使館 / マリアナ政府観光局
沖縄テレビ放送 / NHK沖縄放送局 / FM沖縄 / ラジオ沖縄 / 琉球放送 / 琉球朝日放送



「南」から「南」へ 美術家たちの 南洋群島



備間比呂志「ゆがみ」
1978-84年



美術家たちの「南洋群島」展は、大正から昭和初期にかけて南洋群島へ渡った、多くの日本人画家や彫刻家の美術作品を展示し、日本の美術や文化の形成に南洋群島がどのように関わってきたかを探るものです。

かつて、ミクロネシアの島々は「南洋群島」と呼ばれていました。それは、第一次世界大戦開戦（1914年）の日本海軍による占領統治下と、22年の第二次世界大戦終了まで南洋庁による委任統治領に置かれていた間のことです。1917年からは企業が多くの沖縄県人を募ったことで、本格的な南洋移住を始めました。沖縄県人はすでに海軍占領下より拓殖企業のもとに多く移住し始めましたが、南洋興発㈱が設立された1921年以後からは本格的な移住が始まりました。特にテニアン島は、県出身者が過半数を占めていて、サトウキビ栽培や砂糖の生産、鯉節生産等の農業、漁業などの事業に従事しました。

その頃の沖縄県は、第一次世界大戦後の不景気の影響で、毒性の高いソテツの実を食んで中毒死を招く深刻な食糧不足でありました（いわゆる「ソテツ地獄」）。1943年には南洋庁職員、南洋興発㈱関係者なども含め、日本人の総数が96,670人に上りました。

こうした社会状況にあった南洋（南洋帰還者については「南洋帰り」など、沖

繩での南洋群島にたいする呼称は「南洋」が一般的である。）へ、土方久功（1900-77）、川端龍子（1885-1966）、赤松俊子（丸木俊 1912-2000）などの美術家たちが、文明からの解放や民族誌学的な関心などから訪れました。時を同じくして、沖縄県出身の美術家、儀間比呂志（1923-）もまた南洋を訪れ、球陽座で沖縄芝居に触れて郷土の文化に親しみました。杉浦佐助（1897-1944）との偶然の出逢いから美術を志した儀間は、徴兵に伴う検査帰国のため南洋を離れました。杉浦の「テニアンもあぶない。帰郷しなさい。生きて絵を描くんだよ」（絵本「テニアンの青春—十七歳の出奔」2008年、海風社発行より）という言葉通りに、沖縄戦の前線となってしまった南洋で恩師、杉浦を失いました。以後、儀間から南洋での生活について語られることはありませんでした。

町田市立国際版画美術館、高知県立美術館との企画展ですが、沖縄会場では、あらたに儀間作品を加えた展示構成を試みました。日本の南に視座する沖縄で、作品から滲み出るあらたな日本美術の側面に触れ、南へと向かう人間の感覚や文化のありようについて知る好機となれば、幸いです。

【展示構成】

第1部・南洋群島と日本、沖縄…①南洋群島の歴史と文化 ②南進論と南洋群島 ③冒険と幻想

第2部・南洋群島に生きる…土方久功、杉浦佐助、儀間比呂志

第3部・画家の南洋群島行…野口駿尾、五味清吉、上野山清貢、染木惣、赤松俊子（丸木俊）、川端龍子、寺門幸蔵、西尾善積、和田香苗、布施信太郎、藤本東一良、武田範芳、笹鹿彪、佐々木孔

【関連イベント】

オープニングイベント 日時：11月7日（金）18:30 開演 3F 講堂

① 記念講演会「もうひとつの楽園」

第1部：基調講演 講師：岡谷公二（跡見学園女子大学名誉教授、儀間比呂志（美術家）

第2部：パネルディスカッション

パネリスト：岡谷公二（跡見学園女子大学名誉教授）

儀間比呂志（美術家）、滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）

コーディネーター：豊見山愛（沖縄県立博物館・美術館学芸員）

② 芸能公演「芸能にみる南洋」

創作琉球舞踊「南洋浜千鳥」 佐藤 太主子（太主流華の会家元）

民謡「南洋小唄」「シンガポール小」 比嘉 康春（野村流古典音楽保存会会師）・

新垣 俊道（野村流古典音楽保存会教師）・仲村 逸夫（野村流古典音楽保存会教師）

民俗舞踊「島民ダンス」 うるま市栄野比区自治会

トークショー 日時：11月22日（土）13:30 開演 3F 講堂

「美術家・儀間比呂志を語る」 講師：新川明（ジャーナリスト）、川満信一（詩人）

絵本読み聞かせ会 毎週水曜日 10:00～11:00 美術館アトリウム

「ふたたくのおかいもの」「ふなひき太良」 他 読み聞かせボランティア

キュレータートーク 日時：11月16日（日）、12月21日（日）、1月18日（日）14:00～15:00

講師：豊見山愛（沖縄県立博物館・美術館学芸員）

ドーセントツアー 毎週土曜日 16:00～ 美術館 企画ギャラリー1・2

ボランティアによる展示解説

美術講座 毎週水曜日 18:30～ 美術館講座室

第1回：10月8日（水）「南洋群島の画家たち」 滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）

第2回：10月15日（水）「南洋群島展について」 豊見山愛・前田比呂也（沖縄県立博物館・美術館学芸員）

第3回：10月22日（水）「芸能にみる南洋」 大城学（財団法人国立劇場おきなわ運営財団調査養成課課長）

第4回：11月12日（水）「川端龍子、人と芸術」 鈴木高（大田区立龍子記念館ボランティア学芸員）

第5回：11月19日（水）「赤松俊子、人と芸術」 岡村幸堂（丸木美術館学芸員）

第6回：11月26日（水）「丸木俊、人と芸術」 佐喜真道夫（佐喜真美術館館長）

第7回：12月3日（水）「南洋群島以前の南洋諸島」 奥野克仁（高知県立美術館学芸員）

ミュージアムダンスプロジェクト 日時：11月23日（日）18:00～ 美術館屋外展示場

「仮面をつくろう」+「仮面をかぶろう」 構成：知花幸美 造形指導：小川京子

踊り：知花幸美、Tabaan、いと、仲井真麻、仲井真彩、平良直子

映画上映会 日時：平成21年10月10日（土）・11日（日）13:00 開演 場所：3F 講堂

上映作品：①「海の生命線—我が南洋群島—」 毎日映画社 / 1933年 / モノクロ / 72分

②「鉄の子カナヒル」 原作：儀間比呂志 / 製作・監督：比嘉一哲、比嘉之典 / カラー / 32分



藤本東一良、圓光興「パラオ島アバイ装飾浮き彫り拓本」 1937年（町田市立国際版画美術館蔵）



儀間比呂志「野あそび」 1960年代



赤松俊子「アンガウル島へ向かう」 1941年（個人蔵）



川端龍子「椰子の篝火」 1935年（大田区立龍子記念館蔵）



土方久功「美しき日」 1970年（世田谷美術館蔵）



沖縄県立博物館・美術館

〒900-0006

沖縄県那覇市おもろまち3丁目1番1号

Tel:098-941-8200（代表）

URL <http://www.museums.pref.okinawa.jp>